

日本語教育におけるe-learning利用の可能性

-ALC NetAcademy 導入の事例から-

東北大学高等教育開発推進センター教授 佐藤 勢紀子

Sekiko Sato

1. 日本語教育と e-learning

今世紀初めの e-Japan 計画の策定を機として、日本の高等教育機関における e-learning 導入の必要性が唱えられるようになり、近年、教育制度、Web 利用環境の整備が急速に進められてきた⁽¹⁾。現在、大学卒業に要する 124 単位のうち 60 単位までを e-learning によって取得することが認められており、インターネット・スクール等の開設もさかに行なわれている。

高等教育機関における外国人留学生を対象とする日本語教育の現場でも、近年とみに e-learning 導入の必要性が言われている。その主な要因としては、1) 予算・人員の削減によるプログラムの縮小、2) 大学間、もしくは学内での組織改編による教育の場の広域化が挙げられる⁽²⁾。これらの問題は特に 2004 年度の法人化後顕在化したもので、機関全体の問題でもあるが、とりわけ日本語教育の現場において深刻な様相を見せている。

留学生 30 万人計画が打ち出されて、留学生の受入れ数を大幅に増やすことが奨励されているが、グローバル 30 の指針にも窺えるように、英語による留学生教育の推進に重点が置かれ、多くの機関で日本語教育の充実は二の次になっているのが現状である。さらに、2011 年 3 月の東日本大震災は、原発事故の影響もあって、全国レベルでの留学生数の減少をもたらした。このような未曾有の災害の勃発は、昨今の世界経済の動向とあいまって、留学生の受入れとその教育について安定的な将来像を描くことができにくい状況を生み出している。こうした状況のもとで、日本語教育に e-learning を取り入れることがますます必要になっていることは明らかである。

現在、日本語の総合的学習のための e-learning 教材としては、「アニメ・マンガの日本語」(国際交流基金)、JPLang (東京外国語大学)、JEMS (名古屋大学) などが公開されており、また、読解や作文の支援ツールとしては「リーディングチュウ太」、「あすなろ」、「なつめ」などが開発され、広く利用に供されている⁽³⁾。しかし、日本語 e-learning に関して指摘されている、その利用環境が急速に進んでいる割にはコンテンツの開発が不十分であるという状況⁽⁴⁾は現在も大きく改善されたとはいえない。

本稿では、日本語教育への e-learning 導入の一つのケースとして、東北大学の全学対象日本語教育プログラム「外国人留学生等特別課程」ⁱにおける「ALC NetAcademy 日本語コース」ⁱⁱ 導入の事例を取り上げ、利用者の評価を紹介するとともに、同教材をより効果的に利用するための機関側の課題について考えてみたい。

2. 「ALC NetAcademy 日本語コース」の導入

2.1 「ALC NetAcademy 日本語コース」の概要

「ALC NetAcademy」はLAN環境を活用するイントラネット型英語学習システムとして1998年から制作され始め、現在日本全国の約400の教育機関で使用されている。「ALC NetAcademy 日本語コース」は、同様の方式による日本語学習システムとして企画・開発され、2005年3月にリリースされたe-learning教材である。同教材の学習補助言語は英語および中国語で、現在提供されている「ALC NetAcademy2 日本語コース」のコースウェアは、以下の5つのサブコースで構成されている⁽⁵⁾。

聴解	30 ユニット	
読解	30 ユニット	
語彙	300 ユニット	
能力試験ミニテスト	12 ユニット	
文字	1 ユニット	

筆者はこのうち語彙コースのコンテンツの企画・開発に関わった⁽⁶⁾。
システムの構成を図に示す。

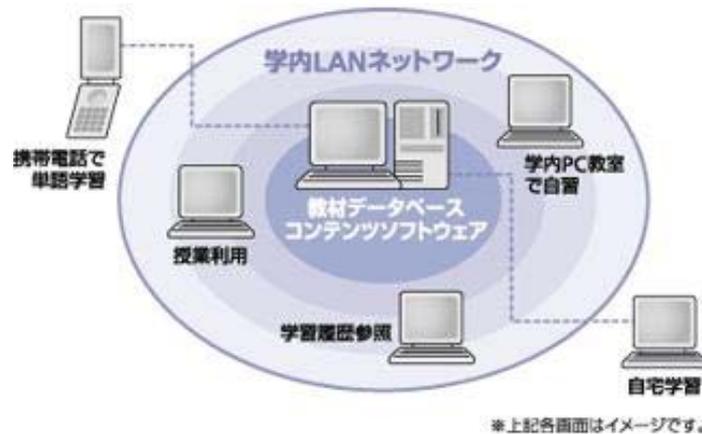


図 ALC NetAcademy のシステム構成

利用機関内に「ALC NetAcademy」サーバを設置し、イントラネットを通じて学習者に教材を提供する。学習者はLANに接続された端末PCを使用して、いつでも、どこでも学習することが可能である。現在の「ALC NetAcademy 2」では、学外からのアクセスも可能になっている。教育担当側の管理者は、学習者の学習履歴を閲覧し、一括管理することができる。

2.2 東北大学での「ALC NetAcademy 日本語コース」の利用

東北大学では、2005年度に「ALC NetAcademy 日本語コース」を導入し、2009年度

からその改訂版である「ALC NetAcademy2 日本語コース」を利用している。同教材の周知および利用方法の指導は、次のような方法で行なっている。

- 1) 日本語教育プログラム受講案内への掲載
- 2) 日本語教育担当部署ホームページへの掲載
- 3) e-learning ガイダンスの実施
- 4) e-learning 授業の開講

1)は全学対象の日本語教育プログラム「外国人留学生等特別課程」(以下「特別課程」)の受講案内への情報の掲載である。日本語と英語で周知している。

2)は「特別課程」実施主体である高等教育開発推進センター日本語研修室のホームページでこの教材について周知しているものである。これも日・英両言語による。

3)のe-learningガイダンスは、毎学期初めに2回実施し、他のe-learning教材やネット利用学習支援ツールとともに同教材を紹介、利用方法の説明を行ってきた。2010年度後期には学期中に他キャンパスでのe-learningガイダンスを試行しⁱⁱⁱ、2011年度から4)のe-learning授業に組み込む形で、複数キャンパスにおけるe-learningガイダンスを実施している。

4)のe-learning授業は、2005年度以降、「E」というタイトルで「特別課程」の授業の一環として開講してきた⁽²⁾。対面授業とe-learningをミックスさせた、いわゆるブレンディド・ラーニングの試みである。当初は初級前期から中級後期までの4レベルで「E」の授業を開講していたが、経費削減により、現在はレベル共通で1クラスのみ「E」を開講している。この授業の概要については次のように周知している⁽⁷⁾。英語訳も付けられているが、省略する。

内容:e-learningプログラムを利用して日本語を学びます。クラスに来るのは3回だけです。

1. 学期の初めに教師と話し合って到達目標を決め、学習計画を立てます。
 2. 学期の半ばに到達目標について見直しをします。
 3. 学期の最後に学習計画がどの程度達成できたか教師と一緒に自分で評価を行います。
- その他の時間は、チャットやメールなどネット上で授業担当者の助言を受けながら、自分の学習計画に従ってe-learningで学習します。

「E」の授業では、前述のように、各キャンパスを巡回してのe-learningガイダンスも行なっている。

3. 導入教材の評価—利用者アンケートの結果より—

「ALC NetAcademy 日本語コース」を導入した2005年度末に、利用者を対象としたアンケート調査を実施した。アカウント発行数は「特別課程」登録者450名、利用者数は201名であり、うち50名から回答を得た。調査の概要と主な結果は、以下のとおりである^{iv}。

1) 調査の概要

対象者：「特別課程」登録者

期間：2006年2月21日～2006年3月3日

方法：eメールで調査票（日本語版・英語版）を送り、回答を依頼

調査項目：国籍、所属、身分、日本語能力のレベル（自己評価）、
プログラムの必要度、プログラムの利点、その他コメント

2) 調査の結果

① プログラムの必要度

必要不可欠：18（36%） あった方がいい：23（46%） なくてもいい：0（0%）
わからない：0（0%） その他：4（8%） 無回答：5（10%）

② プログラムの利点（回答から一部抜粋、原文のまま、下線は筆者による）

利用時間、利用場所

- ・ このプログラムは便利です。いつもどこでも勉強をできます。
- ・ Since I am working in the laboratory, I don't have enough time to go to the Japanese class on the Kawauchi campus. This e-learning program is really useful to me. I can arrange Japanese study according to my work schedule.

自主学習

- ・ You learn what you need not what is offered. It is a very interesting program.
- ・ This program supply us the study materials for different level, and it is very useful for self-study.

内容

- ・ この e-learning プログラムは便利だと思います。絵や、声や、文字や、練習や、注釈などの内容がありますので、とても豊富です。
- ・ Convenient and the design of this program is very reasonable, with overall contents in daily life in Japan and practicality.
- ・ 生活によく使っている言葉を教えているので、とても役に立つと思います。
- ・ 日本の文化、生活習慣、日本人の考え方など読論文を読んではっきりわかるようになりました。

テスト

- ・ The tests really helped me in all aspects such as listening, reading and speaking.
- ・ 自分語学能力をテストできます。問題の答えも（ほぼ）詳しく説明してもらえます。

学習履歴閲覧

- ・ We may look through what we have learned by this e-learning program. It's very helpful.

③ その他のコメント（回答から一部抜粋、原文のまま、下線は筆写による）

学外での利用

- ・学校を含んで家で接続できたら良いと思います。
- ・ I think if there is an option to use this program outside the campus with individual user password, it can be more effective. Students can use it evenings or weekends.

内容の拡充

- ・ 文法の方がもっと詳しく説明してほしいです。
- ・ I hope that you can add more listening materials.
- ・ さらに Video（映像）と一緒にあればいいと思います。

継続の要望

- ・ I would like to join again to improve my Japanese language.
- ・ I wish this e-learning program will continue next semester.
- ・ Please continue this kind of program.
- ・ I would love to continue to learn this program and hope to activate the invalid account as soon as possible.

その他

- ・ 学習の時、問題があれば対処がないため、対面授業（メールのやり取りで問題対処などの措置）と併せて使った良いと考えています。
- ・ It seems that it may be important to schedule a special meeting for a free discussion among the participants. This is of course to train our ability in Japanese speaking.
- ・ 国へ帰ってからもこういう練習できたらよいかと思います。

調査の回収率は25%で高いとは言えないが、得られた回答に見る限り、①プログラムの必要度について、「ALC NetAcademy 日本語コース」が「必要不可欠」もしくは「あった方がいい」とする回答者は82%に上り、その他「とても重要」もしくは「もっと使う機会があればいい」と記述した回答者が3名いたことも考え合わせると、利用者の同教材への満足度が極めて高いことが知られる。また、②「プログラムの利点」として、いつでもどこでも使えること、自律学習によいこと、内容が豊富で役にたつこと、テストや学習履歴閲覧の機能が付いていること、などが挙げられている。特に、「利用時間、利用場所」の項に見られる英文のコメントは、日本語授業に参加する時間的余裕がない留学生等にとって e-learning が有用であることをあらわしている。どこの教育機関でも、留学生や外国人研究者から、キャンパスの違い、研究や仕事の忙しさ、専門課程の授業のスケジュールなどにより日本語授業に参加できないがどうしたらよいか、という相談が寄せられることが少なくないと思われるが、e-learning の導入がその問題の一つの解決策になることは疑いない。利用者の満足度の高さは、③「その他のコメント」における、このプログラムを継続してほしいという要望にも現れている。同様のコメントは、調査の回答の送り状にも多数見られた。

一方、調査の回答では、「ALC NetAcademy 日本語コース」の改善すべき点も指摘されている。③「その他のコメント」に見られるように、学外利用、内容の拡充が主なポイントである。このうち前者については、先に触れたように、「ALC NetAcademy2」の提供にともない、オプションとしてではあるが、学外利用が可能なシステムを導入できるようになった。調査の回答に限らず、研究室では利用しにくい、夜間や休日に家で利用したい、などの声が多く寄せられていたため、システム改善により学外利用が可能になったことは大きな進展であった。一方、後者については、内容が「豊富」「役に立つ」とする利用者もいる一方で、上記のように、量を増やしてほしい、文法説明の補充やビデオの導入を、といった要望も見られた。量の問題に関しては、「ALC NetAcademy2」において、平仮名・片仮名および基本漢字が学習できる「文字」のサブコースが新たに開設されたが、他のサブコースのユニット数には変化がなく、特に聴解や読解について、今後のコンテンツ拡充が望まれる。また、文法解説の見直し、動画の活用などにより、既存のユニットの内容が利用者により明確に伝わるよう工夫することも必要であろう。

4. 今後の課題—導入教材の効果的利用—

以上、「ALC NetAcademy 日本語コース」の概要を紹介するとともに、その利点および改善を要する点について、アンケート調査の結果にもとづいて論じてきた。最後に、導入機関側の教材利用について検討すべき点を挙げ、同教材の効果的利用の可能性について考えてみたい。

まず、教育機関の利用の仕方について検討を要する点を考える。東北大学の特殊な事情かもしれないが、現在のところ次の問題点がある。

- 1) 非正規留学生（研究生等）の場合、アカウント取得に手間がかかる。
- 2) 「E」の授業を除いて、授業の中での同教材の活用が不十分である。

1) について説明を加えれば、2009年度までは「特別課程」登録者すべてにアカウントを配付し、即日利用可能なシステムになっていたが、2010年度以降、全学認証システム「東北大学 ID」のアカウントで同教材にアクセスする仕組みになった。研究生等の非正規学生は自ら担当事務に申請し、一定期間を経てからでないと「東北大学 ID」が取得できないため、同教材の利用率が以前より低下し、ID取得の奨励・支援にあたる教職員の負担も大きくなっている。よりスムーズなアカウント取得の方法を検討する必要がある。

2) については、対面授業とのブレンディド・ラーニングを行なう「E」の授業が削減されたため、以前より問題が大きくなっている。一般日本語授業の中での同教材の取り込みが望まれるが、現在のところ、ほとんど実現できていない。同教材は個々の留学生等の自律学習、授業の復習には役立っているが、先のアンケート調査の③「その他のコメント」で利用者が提言していたように、機関の日本語カリキュラムに組み込む形で十分に活用することが望まれる。

このような検討課題をふまえて、今後の「ALC NetAcademy 日本語コース」の利用環境改善、利用促進については、さしあたり以下のことを計画している。

- 1) 「東北大学 ID」が非正規生によりスムーズに配付されるよう担当部署に働きかける。
- 2) 「特別課程」の日本語カリキュラムに同教材を組み入れ、授業の中での同教材の利用を促すとともに、同教材の学習履歴閲覧システムを利用して、学習実績を現行の進級システム^vに反映させる。

さらに、将来的には、「ALC NetAcademy 日本語コース」について、次のような利用の仕方を検討することも可能ではないかと考えている。

- 3) 同教材のテスト機能を、プレースメント・テスト(レベル判定試験)に活用する。
- 4) 留学が決まった学生に事前にアカウントを付与、また留学を終えて帰国した学生に一定期間引き続きアカウントを付与し、留学生の来日前、離日後の日本語学習を支援する。

本稿では、東北大学における「ALC NetAcademy 日本語コース」導入の事例を紹介し、日本語教育における学外との連携による e-learning 利用の可能性について考えた。あくまで特定の教育機関の一事例にすぎないので、一般化できない部分もあると思われる。また、語学教育においては対面授業が基本であって、e-learning はその補助的な役割を果たすものとして位置づけられるべきであることは言うまでもないが、本稿の事例紹介が、少しでも留学生教育に携わる関係機関の方々の参考になれば幸いである。

文献

- (1) 菊地俊一 (2006) 「「e-Japan 戦略」による e-learning の普及について」『名古屋外国語大学 外国語学部紀要』第 30 号, pp. 33-57
- (2) 佐藤勢紀子・上原聡・加藤弘・福島悦子・中村渉 (2007) 「日本語教育における Web 利用の現状と課題—カリキュラムおよび運営方法の改善に向けて—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 2 号, pp. 297-310
- (3) 市原明日香・吉田麻子・井出晃憲・鈴木修子・今井新悟 (2011) 「日本語教育における e ラーニング利用の現状と課題」『教育システム情報学会研究報告』第 25 巻第 7 号, pp. 83-88
- (4) 仁科喜久子 (2003) 「第二言語としての日本語の学習環境と ICT 利用支援」『日本教育工学雑誌』第 27 巻第 3 号, pp. 233-236
- (5) アルク教育社ホームページ (http://www.alc-education.co.jp/academic/net/co_japan.html)
- (6) 佐藤勢紀子・佐藤保子・虫明美喜・吉本啓 (2005) 「オンライン語彙コースの開発」『メディア教育研究』(メディア教育開発センター) 第 2 巻第 1 号, pp. 113-120

- (7) 東北大学高等教育開発推進センター日本語研修室(2011)『東北大学外国人留学生等特別課程(日本語)受講案内 平成23年度後期』, p. 32 (<http://www.he.tohoku.ac.jp/SJLE/JLPK/>)

-
- i 東北大学に在籍する外国人留学生および外国人研究者を対象とする日本語補習のための日本語教育プログラム。2011年度後期においては、初級から上級まで33科目68クラスを開講している。
- ii コンテンツ開発元：株式会社アルク。システム開発元：日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社。販売元：株式会社アルク教育社。
- iii 東北大学には5つのキャンパスがある。「特別課程」の授業は川内キャンパスで開講しているが、2010年度後期には工学部、理学部等のある青葉山キャンパス、農学部のある雨宮キャンパスでもe-learningガイダンスを実施した。
- iv アンケート調査票とより詳細な調査結果については、文献(2)の付録を参照されたい。
- v 「特別課程」では、初級から上級まで5レベルの学習段階を設け、各レベルで一定数の「AA/A」の成績を取れば次学期にはプレースメント・テストを受けずに一つ上の段階に進級できるという方式をとっている。